

近代中国語敬辞の意味ネットワーク

The Meaning Chains of Honorifics in Early-modern Chinese

彭 国 躍

1. はじめに
2. メタファーと概念の獲得
3. 陰陽モデルの特殊性と普遍性
4. 経験的基盤に基づく敬辞の意味ネットワーク
5. おわりに

1. はじめに

陰陽カテゴリーは一つの世界観、宇宙観として、宗教、哲学、自然科学、医学などの広範な領域に渡って中国文化に大きな影響を与えた。陰陽カテゴリーの内部の各成分はいったい何に基づいて区分され、関連付けられたのか、それは哲学における認識論、範疇論の問題だけでなく、意味ネットワークの形成という点で言語学の意味論研究においても極めて興味深い問題である。この研究では陰陽モデルによって形成された近代中国語の敬辞表現に焦点を絞り、陰陽カテゴリーに属する各概念間に存在する意味ネットワークについて考察したい。

2. メタファーと概念の獲得

近代中国語の敬辞の対人的機能はメタファーによって実現したものである。言語行動において丁寧に振る舞おうとすれば、相手のことに関しては「大～、貴～、尊～、高～、令～、賢～、明～、龍～、鳳～、玉～、金～、光～…」などの尊辞と呼ばれる表現を通して、自分のことに関しては「小～、賤～、卑～、下～、拙～、劣～、俗～、愚～、寒～、犬～、蝸～…」などの謙辞と呼ばれる表現を通してメタファー的に表現するのである。これらの敬辞表現の意味ネットワークの問題を検討する前に、まず一般的なメタファーの意味獲得のプロセスについて考える。

人間の思考は想像力に深くかかわっているということは、近年の認知科学分野の研究で明らかになった。人間は、経験に直接根差さないような概念領域をメタファーや心的イメージなどを介して理解するという認知能力を持っていることがよく指摘されている。(Lakoff and Johnson 1980, Lakoff 1987, 山梨 1988, 1995を参照) メタファーを通して理解された概念領域の多く

は、外界の現実そのままの反映、ないしは表象ではなく、人間の五感で直接感知できる領域を越えたものである。人間はメタファーなどの想像力の営みを通してはじめて抽象的な思考活動が可能となり、目に見えない世界、直感できない世界にまで理解の触手を伸ばすことができるのである。

このような認識に立ってメタファーを見直すと、メタファーは従来のレトリックで扱われ、詩などの文学作品に見られるような、単なることば上の彩の問題にとどまらなくなる。メタファーは人間が新しい概念や知識を獲得するための重要な手段であり、世界を理解する際の認知能力、人間社会に偏在する思考機能の一つとしてみなおされる。

言葉の意味の獲得は、このような人間の思考機能と密接に関係する。人間の外部世界の事物への認知、理解は、概念化の作業を通して行われるが、レーコフ(1987)によれば、その概念化の過程には二つの基本的なモデルが存在する。一つは、人間の身体的な経験によって知覚された概念形成以前の構造——基本レベルとイメージ・スキーマを直接概念化することである。もう一つは基本レベルやイメージ・スキーマの構造を基盤にして、人間の身体的経験を伴わないような抽象的な事柄を概念化することである。

基本レベルの概念とは、あるカテゴリーの中で階層構造をなす諸概念のうち、優先的にかわりの対象として選ばれる概念のことを指すものである。多くの文化において「空、海、山、川、橋、車、花、人、犬、熊、蟬」などのような概念がそれにあたる。例えば、われわれは、窓のガラス張りの上に一匹の蟬がとまっていることに気づき、そのことを他人に伝えようとする場合、理論的には、この蟬のことを「生物、動物、昆虫(虫)、蟬、熊蟬」などカテゴリーの中の各レベルで指し示することができることになっているが、現実には、その中のどの表現も同じ可能性をもって使われるわけではない。特別な事情がない限り、まず予想されるのは「蟬」である。その上位の「生物、動物、昆虫(虫)」などが出て来る可能性は極めて少ない。そして、その下位の「熊蟬」というのも何か特に蟬の種類について言及する必要がなければ現れないだろう。この場合、「蟬」はその概念階層の中での基本レベルにあたる概念になる。このような基本レベルの世界現象は直接概念化することによって理解されるものである。このように理解された概念は基本レベル概念と呼ばれる。

イメージ・スキーマとは、人間が捉えた空間的な構造図式である。イメージ・スキーマによって構造を与えられた概念は、イメージ・スキーマに直接対応するので、イメージ・スキーマの概念と呼ばれる。例えば、〈内/外〉、〈前/後〉、〈上/下〉、〈中心/周辺〉などに関する一連の空間の概念体系は人間の身体的経験で知覚した〈内/外〉、〈前/後〉、〈上/下〉、〈中心/周辺〉のイメージ・スキーマによって直接構造を与えられ、理解されるのである。

そして、基本レベルやイメージ・スキーマ以外の抽象的な概念への理解はメタファーという認知手段によって行われる。つまり、われわれが直接感知することができないような領域又は

概念形成以前の構造を内部に持たないような領域についてはメタファーを通して理解し、概念化するのである。例えば「熊」と「蟬」という二つの基本レベルの概念を組み合わせることにより、蟬の中での色が黒く体形が大きい種類を新しく概念化したり、空間的な〈前/後〉、〈上/下〉の概念を介して、時間に関する〈前/後〉の概念や、社会的地位に関する〈上/下〉の概念を理解したりするような現象である。レーコフ(1987)によれば、われわれの概念体系の大部分はこのようなメタファーによる認知過程を通して獲得されたものである。

このようなメタファーに関する認知意味論的な観点に基づけば、近代中国語敬辞のメタファー現象、例えば、他者のことに関して「金口（お話）、龍児（お坊っちゃん）、光顧（お越し下さる）、天恩（ご恩）、大名（お名前）、垂教（教えて下さる）、下降（いらっしゃる）」、自己のことに関して「抛磚（意見を言う）、犬子（息子）、草字（名前）、小舎（家）、登堂（お伺いする）、仰測（拝見する）」などと待遇的に表現したりするようなことについても、結局、基本レベルやイメージ・スキーマなどの身体的経験による具体的な概念構造を通して、社会的経験による抽象的な人間関係をメタファー的に捉えた結果だと理解することができる。このように考えることにより、中国語の敬辞現象について、単なる中国文化における特殊な現象としてではなく、具象概念を通して抽象概念を獲得するという人間の普遍的な認識作用の中の一つの事例として見る見方が成立する。

3. 陰陽モデルの特殊性と普遍性

具象概念を通して抽象概念を獲得するという認知プロセスは、言語事実として具象概念を表す表現の意味の拡張過程に反映される。しかし、異なる言語社会や文化におけることばの意味拡張は、具象から抽象へというプロセスさえ適用されれば、後は無秩序に行われるというわけではない。それぞれの言語において、具象から抽象へという図式の上に、更に意味拡張に関する自律的で、規則的な方向づけが行われると考えられる。中国語において、ことばの意味拡張の方向づけの一つとして「陰陽モデル」を上げることができる。

陰陽カテゴリーの枠組みには、中国文化と縁の遠い文化圏の人々にとって不可思議で、時にはナンセンスと思われるような特殊性と、世界の多くの文化が持っている普遍的要素という二つの側面が存在する。

陰陽カテゴリーの特殊性について、次の例を通して見る事ができる。中国において、伝統的に、鳥は陽で、魚は陰であり、羊は陽で、犬は陰であり、みかんは陽で、オレンジは陰であり、小豆は陽で、緑豆は陰であるというような分類法がある。前の二対の対立関係は紀元前四世紀に成立した『易経』にすでに記述されていたが、後者の二つの対立は、いまでも通用する漢方の常識である。これらの陰陽分類のうち、その根拠となる理由が忘れ去られ、習慣の一部として受け継がれたものもあれば、現実社会の中で生活の知恵として応用され続けているもの

もある。例えば、盛陽の季節夏には陰性（涼性とも言う）の緑豆を食べ、陰の季節冬には陽性（熱性とも言う）の赤豆を食べるのは体の中の陰陽バランスが取れて健康的であるという考え方は、中国社会において生活の知恵として一般の人々の間で知られている。しかし、陰陽観が存在しない社会では、このような見方も分類法も存在しないのである。

陰陽カテゴリーの普遍性について、次の中、日、英語の意味の拡張現象を通して見ることができる。物理的位置の高いことが、熱いこと、良いこと、パワーが強いことに通じ、その反対の物理的位置の低い状態が、冷たいこと、悪いこと、パワーの弱いことに通じることは、中国だけでなく、日本、欧米など多くの文化や社会に共通する認識である。例えば、

- (1) 温度上昇／熱が上がる／Temperature rises.
- (2) 行情高漲／景気は上向いている／Things are looking up.
- (3) 他権力至高無上／彼は権力の絶頂にある／He's at the height of his power.

中、日、英語の社会において、いずれも、物理的な上下概念を表すことばが、温度の熱さ、経済状態のよさ、パワーの強さなどの領域に意味拡張し、各概念の間に同じ方向で意味の転移が行われていることが分かる。ただし、中国社会では、古くから「高い、熱い、よい、強い」など意味の移転が行われる諸概念は一つのグループにまとめられ、「陽」という上位概念によって抽象化されている。これらの概念と反意関係にある「低い、冷たい、悪い、弱い」などは「陰」という概念で抽象化されている。(1)～(3)の例に示されているように、「陰陽」という包括した上位概念を持つ中国社会においても、また、「陰陽」が外来概念として伝わってきた日本社会においても、そして、伝統的にこのような上位概念を持たない英語社会においても、同じ方向で意味の変化と転移が行われていることが分かる。「高い」という概念が「寒（冷たい、悪い、弱い）」に関連付けられなく、「熱（暑）い、良い、強い」に関連付けられることは、中国、日本、欧米など多くの文化における共通の認知構造に基づくものだと考えることができる。この事実は、陰陽モデルに基づく概念間の写像と意味の転移現象に、多くの文化や社会に共有する普遍性が含まれていることを示唆するものである。

4. 経験的基盤に基づく敬辞の意味ネットワーク

他の文化との比較により陰陽枠組みに特殊性と普遍性が見えてくるが、中国文化の中では、この陰陽枠組みは、特殊性も普遍性も含めて一つの統合的な宇宙観、世界観として自律的に機能している。陰陽カテゴリーに属するすべての概念が一貫したネットワークによって結ばれ、関係付けられている。これから、敬辞表現の諸概念に焦点を絞り、中国人が、伝統的に世界のさまざまな現象を組織化し関係付ける認知プロセス、対人メタファーの媒体となる各概念間の意味ネットワーク及びそれを構成するきっかけとなる経験的基盤について考察したい。

世界現象の最も高次的なカテゴリー——「陰、陽」概念は太陽にかかわる概念から生まれた

ものである。もともと「陰」とは日の当たらないところ、「陽」とは日の当たるところを意味することばである。中国の伝統的な世界観における陰陽構造はこのように日かげと日なたという日常の経験的な領域の概念を通してメタファー的に捉えられ、構造化されたものである。陰陽という抽象的な高次概念が一旦成立すると、日なたと日かげという自然現象も、自ずとこの高次の関係構造の中の一現象として包摂される。中国文化における外部世界の組織化は、日かげと日なたを基底モデルとして、類推によって行われ、広げられたものである。日なたと日かげによって種々様々な概念が同一または対立のカテゴリー成員として関係付けられ、そして、それにより膨大な意味ネットワークが形成されたのである。

まず、建築物のような内側に空間のある物体を想像してみよう。その物体の外側は常に日差しにさらされ、その内側は常に日光の当たらない日かげとなる。日なたと外、日かげと内の間に経験に基づく相関性が認められる。陰陽関係からの類推により、物体の内側と外側との対立概念において、内側は陰のカテゴリーに、外側は陽のカテゴリーに属するとみなされる。

人間は体を覆う皮膚を境界に、自分の身体を容器として認知し、自分の立場から世界を眺める場合、自分と外側の世界との関係において常に自分は内側に、他者は外側にあると認識する。自他と内外の相関性により、まず物理的にいつも自分に近いものは内、自分から遠いものは外という関係認識が得られる。そして、生活や仕事の間を共にする家族や同僚と見知らぬ他人との物理的距離関係が、抽象的な社会的、心理的距離関係へと写像される。中心軸である自分との社会的、心理的距離によって、自分に親しい人、親戚関係にある人などを内側に位置付け、身内の人と認識し、自分との社会的、心理的関係の遠い人、見知らぬ人を、その枠の外側に位置付け、よその人、他人として認識する。このような区分は自分と他者との関係を容器のような物体の内外関係を通じて捉えた結果である。容器の外壁のような視覚などの五感で捉えられる内外の概念を通して、五感で捉えられない抽象的な人間関係における内外の境界を理解するのである。物理的な内外関係の陰陽区分では、内が陰で外が陽であるので、内と外の陰陽関係から類推して、自分と自分側に属する身内の人間は陰で、他者と他者側に属する人間は陽であるということになる。そして、この自他間の陰陽関係を守るように行動し、表現することが礼にかなう行為とみなされるのである（礼と陰陽との関係について詳しくは彭1995bを参照されたい）。

次に、「自陰他陽」という礼の秩序に基づく敬辞表現に現れた陰陽関係の経験的一貫性とその類推過程について記述を試みる。

外側で日の当たる場所は、光に満ち、視覚により明るく感じられるが、日の当たらない内側の場所は常に暗く感じられる。このことから、「暗くくらしい」、闇くやみ」などの概念は陰のカテゴリーに、「明くあかるい」、光くひかり」などの概念は陽のカテゴリーにそれぞれ属することになる。すると、他者が陽のカテゴリーに属することから、他者が陽であるという秩序を守

るために、他者のことに言及する場合、同じ陽のカテゴリーの概念「明」と「光」を用いて表現することが礼儀的であることになる。このような類推に基づき、他者が自分の所に来ることを「光臨（いらっしゃる〈光が臨む〉）」、「光顧（いらっしゃる〈光が訪れる〉）」、「光降（いらっしゃる〈光が降りる〉）」などと表現し、他人の考え、意見、判断、教えなどを「明裁（ご判断〈明るい裁断〉）」、「明断（ご判断〈明るい判断〉）」、「明見（ご意見〈明るい意見〉）」、「明教（お教え〈明るい教え〉）」などと表現する「尊辞」が成立する。

ここで、敬辞が修飾する表現が行為概念を表す場合、文法的な枠組みの制約を受けないということについて一言付言する必要がある。これらの表現は日本語に訳す場合動詞形か名詞形のどちらかの表現になるが、中国語としては、動詞として使われようが、名詞として使われようが、語彙形態の上では区別がないので、どちらの意味とも理解され得る。例えば、具体的な文の中で「明裁」の「裁」が名詞として使われる場合「明るい裁断」、動詞として使われる場合「明るく裁断する」とそれぞれ意味するが、語彙レベルでは、「明」という性状概念で裁断、判断という行為概念「裁」を限定するだけで、名詞、動詞などの文法カテゴリーにとらわれない。この問題に深入りすれば、中国語に品詞があるかないかというかつて大々的に展開された品詞論争に行き着くが、ここではこの問題についての議論を割愛する。

日の当たる所は暖かく、または熱（暑）く、日の当たらない所は涼しく、または寒いことから、「暖、熱、暑」などの概念は陽で、「涼、冷、寒」などの概念は陰である。陰陽の秩序に基づき、自分のことに関して「寒い」方に位置付けて表現するのが礼儀的になる。そのため、自分が住んでいる所、または自分とかわりのある場所を、「寒」を冠して「寒家（私の家〈寒い家〉）」、寒舎（私の家〈寒いあばらや〉）、寒村（私の田舎〈寒い村〉）、寒族（私の親族〈寒い親族〉）」などと表現する「謙辞」が成立する。

太陽の光は天の上から注ぎ、地下には光が届かず、闇になる。自然の状態では物体の上向きの部分は日に当たり、下向きの部分は日かげになる。これらの現象から類推して、天は陽で地は陰であり、上は陽で下は陰である。他者は陽で自己は陰なので、陽に属する他者を高いところに位置付け、陰の自分を低いところに位置付けることは、陰陽の秩序にかない、礼儀的である。それにより、自己の事への言及は自分が低いところにいるように「下」を付けて表現し、他者に対する自分の行動は上向きの動作のように表現する。例えば、「下官（私〈下の官吏〉）」、「下士（私〈下の読書人〉）」、「在下（私〈下にいる者〉）」、「瞻仰（拝見する〈見上げる〉）」、「仰測（拝見する〈見上げる〉）」、「登堂（参る〈お宅に登る〉）」、「高攀（お付き合いする〈高くよじのぼる〉）」などである。そして逆に他者のことへの言及は、他者が上にいるように「上、高」を付けて表現し、他者が自分に対して何かをする場合は、下向きの姿勢を付けて表現する。例えば、「上姓（お名前〈上の名前〉）」、「高居（お住まい〈高い住まい〉）」、「高懷（お気持ち〈高い懷〉）」、「垂救（お助けくださる〈垂れて救う〉）」、「下教（お教えくださる〈下向きに教え

る>>),「俯納(お納めくださる<俯いて納める>>)」などである。

日本語において「下さる」,「申し上げる」,「差し上げる」などの敬語表現にもこのような垂直空間における自他の位置づけの形跡が見られ、英語においても「His Highness, Your Highness(殿下)」のような表現が存在する。この現象から物理的空間の上下関係を通して社会的、心理的人間関係を捉えることは中国語、日本語と英語において共通していることが分かる。

物体の外側は内側を囲み、外側は常に内側より大きい。外陽内陰の関係から「大」は陽で、「小」は陰であると類推される。陰陽の秩序を守るために、陽である他者のことを大きいものとして表現し、陰である自分のことを小さいものとして表現することが礼儀的になる。それにより、他者のことに関して、「大名(お名前<大きい名前>>)」,「大作(あなたの作品<大きい作品>>)」,「大教(お教え<大きい教え>>)」などと「大」を付して表現し、陰である自分のことに関して「小人(私<小さい人>>)」,「小舎(私の家<小さいあばらや>>)」,「小物(自分からの贈り物<小さい物>>)」などと「小」を冠して表現する敬辞現象が生まれる。

因に、日本語の敬語接頭辞「お」は語源的に「オホミ(大御)」における「大きい」という意味に由来するものであるが、この現象から日本においてもかつて他者のことを大きいものとして表現することが礼儀的だったことが窺われる。

物が累積しその量が多ければ多いほど、体積も当然大きくなり、そして高さや厚さが増していく。量の観点から見ると、高いことや厚いことは深いことにも通じる。そして農耕社会において豊作になれば、物が多くなり、経済的利益が増え、生活が豊かになる。神への祭典や行事なども盛んに行うことができる。そこで、「多, 大, 高, 厚, 深, 豊, 盛」の諸概念の間に、ある種の経験に基づく関連性が認識される。そしてその反対の概念「少, 小, 低, 薄, 浅, 貧, 衰」の間にも同じ関連性が成立する。高さや大きさの陰陽関係などからの類推により、「多, 厚, 深, 豊, 盛」などが陽に属し、「少, 薄, 浅, 貧, 衰」などが陰に属することになり、様々な性状概念に関する陰陽のカテゴリー区分が成立する。その結果として、前に上げた「高」と「大」の外に、他者のことに言及する場合は、他者の気持ちを「厚意, 厚情, 盛情」、他者からのプレゼントを「厚賜, 厚儀, 厚礼, 盛礼, 盛儀」、他者の姿を「豊標, 豊采, 豊儀, 豊範」などと表現し、自分のことに関して、自分の命は「微命, 薄命」、自分の家は「貧家」、自分から他者に贈るものを「微忱, 薄礼, 薄冗, 薄饌」などと表現することが一種の敬辞表現になる。

中国人は昔から天上に住む仙人、神の世界を想像し、それにあこがれの念を抱いている。天と地の陰陽関係に基づく類推により、仙界、神の世は陽で、あれふれた人間の俗世界は陰であると認識する。自陰他陽の秩序に基づき、他人の故郷を「仙郷」、他人の容貌を「仙顔, 仙姿」、他人の住まいを「仙庄」などと表現することが礼儀正しいことになる。

仙人や神は超人的で、強力なパワーを持っているということから、強いことは陽で、弱いことは陰である。パワーや神通力があり、仙界に通じ、半ば神のような存在、動物の「龍, 麒麟,

鳳凰、駿馬、鴻…」と植物の「靈芝、椿、萱…」(靈芝は万病に効く薬として、椿は千年も生きられる樹木として、そして萱は愁いを忘れさせてくれる神秘的な草として伝えられている)などは陽のカテゴリーに属し、神通のパワーがない日常にありふれた家畜、小動物「豚、犬、蝸…」、植物「草、芻(くさ)、荊(いばら)…」などは陰のカテゴリーに属する。自陰他陽の関係により、他人の子供を「龍駒<龍の子供>」、麟兄<麒麟の子供>、千里駒<駿馬の子供>、鳳雛<鳳凰の子供>」、他人の顔を「芝顔<靈芝の顔>」、「芝眉<靈芝の眉毛>」、他人の父親を「椿庭<椿の庭>」、他人の両親を「椿萱<椿樹と萱草>」などと表現し、自分の子供や妻のことを「犬子、豚息、犬婦、賤荊」、自分の名前を「草号、草名、草字」、自分の家を「蝸居、草舎」、自分の意見を「芻議<草の議論>」、「芻言<草の言葉>」などと表現することが礼儀的になる。

伝統的な中国社会において金、玉、真珠、錦などの宝物は、経済的な価値が高く、珍しく、しかもある種のパワーがあると信じられている。ほうきや煉瓦や洗面用具などの日用品は価値が低く、どこでも入手できるありふれた物で、神秘的なパワーを有しないものである。価値の高さ、珍しさ、パワーの強さなどの尺度における陰陽関係からの類推により、金、玉、真珠、錦などの貴重品は陽で、ほうき、煉瓦、洗面用具などの日用品は陰である。この陰陽枠組みによって対人関係において、他人の言葉、文章、詩歌、筆跡などを「金玉、金口、珠玉、宝章、宝墨」、他人の気持ちを「錦念、錦注」、他人の親戚を「宝眷(ご親戚<宝の親戚>)」、他人の店や船などを「宝店、宝船」などと表現し、自分のことを「箕帚<ほうき>、巾節<洗面用具>」、自分の意見を言うことを「抛磚<煉瓦を投げる>」と表現することが礼儀的である。

戦闘や格闘競技などで勝者は上位に立ち、敗者は倒れて下位になる。そこに支配は上、服従は下の関係が成立する。祭典や儀式などにおいて尊い身分の人は支配者の立場として上位に据えるなどのことから、社会的上位と物理的上との間に、そして社会的下位と物理的下との間にそれぞれ経験に基づく相関性が成立する。上が陽、下が陰ということからの類推により、社会的地位の高い人、支配の立場にある人は陽で、社会的地位の低い人、被支配の立場にある人は陰である。言語行動において、他者を社会的地位の高い人として位置付けて表現し、自分を社会的地位の低い人として位置付けて表現することは陰陽の秩序にかない、礼儀的である。実際に高い官職、先生の立場にない人に対しても、「大官、長官、先生」などと表現し、相手とは師弟関係、上司と部下の関係でなくても、自分のことを「小生、学生、下官」などと表現する。それにより社会関係における陰陽秩序が守られることになり、礼にかなうことになる。

家族内での関係において、一般的に人間は成長するにつれて知識が増え、体格が大きくなり、力も強くなることから、経験的に年上は「賢、高、上、大、強」などに相関し、年下は「愚、低、下、小、弱」に相関する。そして賢さ、高さ、大きさ、強さなどにおける陰陽区分による類推に基づき、年長者は陽で、若年者は陰である。実際話し手と相手は家族関係における長幼関係でなくても、礼儀的に相手に対して家族内での年長者として扱い、しかも、それに「老」

や「大」（ここでの「大」の意味はすでに物理的大きさから年齢の大きさに転意したと考えられる）を付して、「老爺〈年とったおじいさん〉、老爹〈年とったお父さん〉、老伯〈年とったおじさん〉、大兄〈大きい兄さん〉」などと呼び、自分のことを家族関係の下位者として「小弟〈小さい弟〉、小妹〈小さい妹〉、小妾〈小さい妾〉、小兒〈小さい息子〉、孩兒〈息子〉」などと自称する。

伝統的な中国社会において、身分的、家族的下位者が上位者に対して、「拜（おがむ）」、「伏（ふせる）」などの低姿勢を示す礼行動を取ることが求められていた。社会関係における陰陽区分に基づいて身分的下位者の行為は陰のカテゴリーに帰属する。言語表現において下位者が上位者に対して何かを行ったと表現する場合、実際低姿勢の礼行動を伴わなくても、表現上それらの行為概念に言及することによって、その行為が行われた場合と同じ対人的効果が生まれる。例えば、もともと相手から物を受け取る場合に拝んで受けるのが礼儀的である。そして、恩恵などを受け、感謝の意を示す場合も、拝むのが礼儀的である。このような身体的な動作による礼行為からのメタファーにより、相手にかかわる自分の行為に言及する場合に、実際に拝む行為をしていなくても、表現上そうするように言うことが礼儀的な言語行動になる。他人の作品を読むことを「拜讀（拝読する〈おがんで読む〉）」、他人の物を借りることを「拜借（拝借する〈おがんで借りる〉）」、他人にお願いすることを「伏乞（お願いする〈ふせて乞う〉）」などと表現することが礼儀的であり、一種の敬辞表現になる。

以上の記述は、敬辞現象のすべてを網羅したわけではないが、この記述で十分分かるように、近代中国語における様々な敬辞は、単に恣意的で、個別的に存在したわけではなく、それぞれの概念は「陰陽」という認知モデルに基づく経験的一貫性によって結ばれている。以上の記述を通して、陽のカテゴリーに属する諸概念「明るい、高い、大きい、厚い、深い、盛ん、豊か、龍、鳳凰、靈芝、金、玉、年上…」などが尊辞として利用され、その反対の陰のカテゴリーに属する諸概念「寒い、低い、小さい、薄い、貧しい、浅い、犬、豚、草、煉瓦、年下、拝む、伏せる…」などが謙辞として利用された背景には、首尾一貫した意味ネットワークが機能していたということが明らかになった。

5. おわりに

従来、カールグレン（1918）や趙元任（1956）などの言語学者によって、近代中国語の敬語表現の存在が指摘されたが、その体系が如何なるものかについては、明確な記述が行われなかった。現在でも、既成の多くの言語理論では中国語の伝統的な敬語表現を体系的に捉えることができない。その一番の原因は、言語の形式体系（構文や形態）にとらわれ、敬語現象を中国の文化的世界観、価値観の背景から切り離し、以上で述べたような、個々の表現の間に存在する相関関係、意味ネットワークを見逃していたためだと見ることができる。

参考文献

- Bernhard Karlgren 1918 『Ordet och Pennan i Mittens Rike, Stockholm.』岩村忍, 魚返善雄訳『支那言語学概論』東京文求堂, 1937
- Brown, P. and Levinson, S. 1987 『Politeness: Some Universals in Language Usage.』Cambridge University Press.
- Chao, Y. R. 1956 「Chinese Terms of Address」『Language』Vol.32. Journal of the Linguistic Society of America p217~244
- 陳海烈, 徐英編 1989 『礼貌詞語詞典』廣州文化出版社
- Gu, Yueguo. 1990 「Politeness phenomena in modern Chinese」『Journal of Pragmatics14』p237~257
- 顧日国 1992 「礼貌, 語用与文化」『外語教学与研究』4月号 北京外国語学院
- 井出祥子, 彭国躍 1994 「敬語表現のタイポロジー」月刊『言語』9月号
- 井出祥子, 彭国躍 1996 「Linguistic Politeness in Chinese Japanese and English from A Socio-Historical Perspective」『言語学林 1995~1996』三省堂
- 興水 優 1977 「中国における敬語」『岩波講座 日本語 4 敬語』岩波書店
- Lakoff and Johnson 1980 『Metaphor We Live By.』The University of Chicago (和訳『レトリックと人生』渡部昇一, 楠瀬淳三, 下谷和幸訳 1986 大修館書店)
- Leech, Geoffrey. N 1983 『Principles of Pragmatics』Longman Group Limited (和訳『語用論』池上嘉彦, 川上誓作訳 1987 紀伊國屋書店)
- 彭国躍 1991 「明代中国語の敬語とその語用論的方略——『金瓶梅詞話』の会話文分析」『中文研究集刊 ③』白帝社 p29~52
- 彭国躍 1992 「対人関係の修辞法としてのメタファー」日本言語学会第105回大会口頭発表
- 彭国躍 1993 「近代中国語の敬語の語用論的考察」『言語研究』日本言語学会 p117~183
- 彭国躍 1995a 「近代中国語敬語体系の研究——日本語, 英語との対照を視野に入れて」博士(文学)学位論文 大阪大学
- 彭国躍 1995b 「近代中国語敬語体系の理論的枠組み——陰陽世界観に基づく対人関係の認知システム」『富山大学人文学部紀要』第23号 富山大学 p133~166
- 彭国躍 1995c 「『金瓶梅詞話』の年齢質問発話行為と敬語表現——社会言語学的アプローチ」『言語研究』第108号 日本言語学会 p24~45
- 彭国躍 1995d 「メタファー類似性問題の一考察——類似説と創造説の隙間」『日本学報』第14号 大阪大学 p134~158
- 彭国躍 1995e 「近代中国語の敬辞とその被修飾成分との共起関係——親族名称を中心に」『中国語学』第242号 日本国語学会 p104~114
- 彭国躍 1996 「近代中国語敬辞の文脈条件の一考察」『富山大学人文学部紀要』第24号 富山大学 p155~169
- 藤堂 明保 1974 「中国語の敬語」『敬語講座第8巻 世界の敬語』明治書院 p139~162
- 山梨 正明 1988 『比喩と理解』東京大学出版会
- 山梨 正明 1995 『認知文法』ひつじ書房
- 辻村 敏樹 1992 『敬語論考』明治書院